ら近いから。

森川：僕は夫婦でずっとブドウの仕事をやっていきたいなって。そこに住んでいるおじいちゃんおばあちゃんがいるじゃないですか。ほんとあんな感じになりたいなって。

藤田：おかげで高梁紅茶は県内では人気が上がってきたけど、県外はまだまだ。ちょうど今曲がり角なんですよね。やっぱりしんどくなるんですよ。生産を増やしてもっともっと行くか、もうこれくらいでいいかなとも。市の人とも話をして、高梁の知名度もあがるから、そのためにはもうちょっとがんばるかなと思ったり。それから、たくさんある茶畑の管理と品質を考えると、手伝ってくれる人が欲しい。紅茶の楽しみ方もいろいろあるんですよ。可能性は感じています。ただ、なかなか1人じゃできなくて。

「やってる人が楽しいのが一番大事」

今後移住者の方には、是非一緒にお茶づくりを！と呼びかけたいですね。これから来る人にぜひ一言お願いします。

稲毛：移住する側と受け入れる側の、双方の文化を理解するのが基本かなと思っています。我々は、この人はこういう人だって理解してあげられるかなあと思っています。それと宇治の場合は大黒柱になる仕事がない。それでも私は宇治でしたいことがあるという方にはいいですが。

ソミヤ：違うってことを受け入れながらお互いにやっていけるってことですね。

皆川：やっぱり進学のことが気になりますね。宇治では、稀に都市部に行く子もいますが、ほとんどが地元進学。駅が近くない核家族では難しさも感じます。

五月：私がいつも感じるのは、移住定住で「新しい人来てください！」って、一生懸命だけど、逆にその土地で産まれた若い人たちは街に出ていって帰ってこないということがすごく多い。やっぱり新しい人を呼ぶだけじゃなくて、いる人をちゃんと大事にしないとって思います。

藤田：どこも同じこと言うなあ。松原でもそう。

五月：元からいる人が出て行っているんだから、そこをどうにかしないとね。例えば、民泊や婚活でも、来た人が宇治に縁ができたらそれでいいと思う。宇治に住むことにならなくても、「また、行きたい。」という思いを受け止めて、縁をつないでいく温かさが宇治にはあると思う。

藤田：なるほどな。長い目で見てね。いずれ帰ってくるかもしれないってね。言われる通り。僕松原に来て長いけど、違和感いっぱいあったもん。もう意味がない行事や役もあるし、新たに必要な仕事もあるだろうし。そこの見直しをする時期だと思いますね。やってる人が楽しいのが一番大事。その行事が目